傷は隠せないもの

ダイチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
傷は隠せないもの

【Ｎコード】
Ｎ５７４０Ｊ

【作者名】
ダイチ

【あらすじ】
虐待を受けていた柊（ひいらぎ）　香奈（かな）。一度死のうと思ったが、友達の桃恵（ももえ）、藤井（ふじい）、大西（おおにし）のことが頭をよぎって、自殺をあきらめる。
が、虐待の苦しみは消えるわけはなく、リストカットを続けるのだが・・・。
仲間の大切さが分かっちゃうかもしれないような、いや、分からないかもしれないが、仲間は大切なんだよって、伝えたくて書いてみました。

分かってもらえたら光栄ですね。

痛い・・・・

体中が痛い。どのように表現すればいい？
表現できないくらい、痛い。
どうして私の体はあざだらけ。私に何して欲しいの？
どうして私の体は傷だらけ。
どうして私は今、この男(ひと)に殴られてるの・・・？
笑ってる。何でこの男(ひと)は笑ってるの？
怖いんだ。何で私は殴られなければならないの？

私が何したって言うの・・・！！

部屋に引きこもり、死にたいって何回も思った。
でも毎回、自分で傷つけるのが怖くてしなかった。
でも今は、私に生きている意味なんてない、気づいたから。
家族に傷つけられる。その意味が分かったから。
私はいらない子なんだ。
そう、分かってしまったから。
わたしはカッターを持ち出し、左腕に刃を当てる。
力を込め、押していく。
何だ、痛くない。
わたしはこんな事が、こんな簡単なことが出来なかったんだ。
力を込める。痛くない。
硬いものにぶつかる。
何だろう、これ。骨？腱？筋肉？血管？
分からないけど、深くまできてる。それだけは分かった。
血の量から見て、そろそろやばいところ。

何も感じない。ただ、快感が存在(あ)るだけ。
後もう少しで、今までの生活とさよなら・・・・。
そのとき、わたしの頭をよぎった。
そのせいで、すべての感覚が蘇(よみがえ)る。

「うわあああああ！！！」

痛い。痛い痛い痛い痛い痛い。何？何でいきなり。痛い、痛すぎる。
何も考えられないくらい痛い。
でも、何かがずっと脳内をよぎる続ける。
何も考えられなくても、それが何かぐらいは分かる。
もうすぐ楽になれたのに、これらのせいで、死ぬことが出来なくなる。

学校の、あいつらの、笑顔。

私はただこれだけのために、またあの生活に戻ることになるのだ。
さっきの叫び声のおかげで、あいつらがやってくる。
女(はは)が救急箱を持ってきて、傷口をふさぐ。
男(ちち)はその後私を2・3発殴る。
私はそいつらに促(うなが)されるまま、病院に行った。

□■□

「うわぁ！大丈夫？その腕！」
たっかい声がする。そいつは髪の毛をツインテールにしてる。
名前は、新井(あらい)　桃恵(ももえ)。身長は１６０ｃｍ、普通の高さ。
「大丈夫。包丁を滑らせただけだよ」
私は笑う。桃恵は首をぶんぶん振る。頭が飛んでいきそうだ。
「大丈夫じゃないよ！！痛くなかった、香奈(かな)？」

香奈。そう、私。柊（ひいらぎ）　香奈（かな）。身長は１６８ｃｍ、普通より高め。肩まで伸びた髪。
「痛かったよ。深く入ったからね」
「あんまり無茶しちゃだめだからね？」
「うん」
うそ。全部嘘。
包丁？そんな勇気なかったよ。
滑らせて？自分で力を入れていきました。
痛かった？最初は何も感じなかった。
そう、全部嘘だよ、桃恵。
ごめんね。
「おいおい、ボケてんなぁ。怪我なんて」
桃恵とは違う声がする。男子の声。
「大丈夫かい？柊」
優しい声。
「大丈夫だろ。柊だし」
むかつく声。
この二人は正反対。
優しい声は、大西（おおにし）　架（かける）。身長は１７２ｃｍ、男子では普通の高さ。短髪。
むかつく声は藤井（ふじい）　竜哉（たつや）。身長は１６４ｃｍ、男子でこれは小さいだろ。てか、私より小さい。チャラチャラした長めの髪。
「私だからとは何だ」
私は藤井を睨む。藤井は笑って、
「柊はゴリラだもんな？」
私は藤井を思いっきり殴る。
藤井は戦闘不能。机に突っ伏す。
こんなことをするからゴリラとか言われるんだけどな。
「ナイス。柊」
大西は決して私を怒ったりしない。優しいからだ。大西は誰にも怒

らないし、むしろ笑っている。
「香奈すごい！」
桃恵も褒めて来る。
私はこんな人たちを置いて、昨日一人で死のうとした。
それだけ、私はあいつらに追い詰められていた。
今度は死のうとしない。絶対。
でも、あの生活には耐えられない。
私は思い出す。あの、感覚を。
私の唯一の方法。

□■□

今日もまた、あいつらに殴られた。男（ちち）は会社でのストレス、腹いせのせいで。女（はは）はパートでのストレス。私の存在。
何で昨日傷口をふさいだかって？
消えて欲しいと思ってるけど、私がいざ消えたら、怖いからだ。
虐待をしていたことがばれてしまう。今までばれないように、見えないところを殴ったり蹴ったりしてたのに。
ただ、それだけの理由。
私は自分の部屋で、カッターを持ち、左腕に当てる。少し力を入れる。血が少し出る。痛くない。
快感が生まれる。これは、私の絶望を消してくれる気がした。
これで私は耐えられる。仲間と一緒にいられる。
しばらくすると、血が止まる。
血は止まるが、跡が残る。サポーターで隠すことにした。
仲間に心配されるのはいやだ。
あいつらは笑っていたほうがいい。笑っていてもらわないとも困る。

□■□

「おはよー！香奈」
桃恵がくる。いつも元気だ。
「おはよう」
「腕、サポーターにしたんだね」
「まあね」
「痛い？」
私は首を振る。
「痛くない。大丈夫だよ」
桃恵は安堵の笑みを漏らす。
「よかった」
ありがとう、桃恵。こんな私と友達でいてくれて。
「よぉ、柊」
むかつく声。藤井だ。
私は藤井を無視する。
藤井はすねる。
「柊、調子はどう？」
優しい声。大西だ。
「調子はいいよ。ほら、このとおり動くし」
私は動かしてみる。が、やっぱり少し痛くて顔が歪(ゆが)む。
でも分からない程度。ばれない。
「おい柊。痛ぇなら動かすなよ」
でも、藤井は分かった。そんなに分かりやすかっただろうか。
「え、痛いの？香奈」
桃恵が心配する。
「痛いなら無理しなくてもいいよ、柊」
大西が言う。
ばれてなかった。何で藤井には分かった？
何気藤井は観察力がある。厄介だ。

□■□

そうして、毎日が過ぎていった。
男と女に殴られ、リストカットをし、学校で仲間と会う。私は左腕のサポーターは絶対にとらず、毎日を過ごした。
どうしてか、充実していた。

□■□

「おはよー！元気？」
桃恵がやってくる。本当に毎日元気そうだ。
「うん。元気」
私は答える。
「柊、おはよう」
大西がやってくる。
「おはよう」
「おはよー、大西君！」
本当に桃恵は元気だ。
一人足りないのに気づく。
「あれ、藤井は？」
私は大西に聞く。
「あいつは先生に呼ばれてるよ」
「そうか」
私はそっけなく答えた。
「柊さーん」
誰かが私を呼ぶ。うちのクラスの学級委員だ。
「なあに？」
私は返事をする。
「先生が呼んでたよ。大木先生」
大木・・・。私は心の中でうめく。
「分かった。ありがとう。今行くね」

私は桃恵と大西にバイバイをして職員室に向かう。
職員室の出入り口で藤井とすれ違う。すれ違い様に向こうが頭を軽く殴ってきた。むかつく、本当に。
大木先生は私の成績についての話だ。最近成績が下がってきたのを気にしたんだろう。
世話焼きの先生なのだ。
大木の話を適当に受け流し、話は終わる。
「今後はきちんと勉強をするんだぞ」
「はい」
私は職員室を出る。
多分、藤井が先生に呼ばれたのも同じ理由なんだろう。
教室に向かうために歩き出そうとすると、目の前に藤井がいた。
いつの間に・・・。
「どうかしたか？藤井」
藤井は返事をしない。大木にきついことを言われたのだろうか。
まあいいと思い、過ぎ去ろうとする。
「なぁ・・・」
藤井が声を上げる。
私は振り返る。
「何？」
「・・左」
「は？」
意味が分からない。単語じゃ分からないよ。
「左腕」
左腕・・？何で左腕？いまさら？
私は左腕を見る。
「これがどうしたの」
藤井は私を見てくる。なんなんだ、本当に。
「長く・・・ないか」
長い、とは。

「包丁で深く切ったから、サポーターしてるんだよな？」
私はドキッとした。
「あ、ああ」
そんなの、とっくに治ってる。包丁じゃないけど。
藤井は、気づいたかもしれない。
私は一歩下がり、逃げる体制に入る。
「逃げんな」
ばれる。私は逃げることはあきらめた。
「何でだ」
「いう必要はないかな」
「何で！俺のことが信用ならないのか！俺たちが・・・」
「違う！！！」
私はいつの間にか叫んでた。
「・・・・違う」
自分に言い聞かせるように呟く。
藤井はため息をつき、私の左腕をつかむ。痛い。顔が歪む。
藤井はサポーターを無理やりどかす。
「や、やめろ！」
私はあせった。傷が、見られてしまう。
こいつに、こいつらにいらない心配をされる。
でも、相手は男子。力で負けてしまう。
見られた。
藤井は私の左腕を見つめ、驚愕（きょうがく）な顔になる。
傷だらけの、左腕。
「何だよ・・・・これ」
私は答えず、うつむく。
藤井は私の左腕を強く握る。
「何だって聞いてんだよ！！！」
迫力のある、真面目に怒ってる藤井。
私は初めて、自分が悪いことをしてるって気づいた。

何で気づかなかったんだろう。私を心配してくれるやつらがいる。
分かっていたのに、何で気づかなかったんだろう。
多分これを見たら桃恵も怒る。怒ったことのない大西も怒る。
私は初めて気づいた。涙が出てきた。
「ごめんなさい・・」
藤井はあわてる。私は泣くばかり。
「・・・ごめんなさい・・・・・」

□■□

その後、桃恵と大西に左腕のことを話し、こっぴどく怒られた。
でも、これでよかったと思う。これをきっかけに、私は警察に虐待のことを話し、保護された。
私は、本当の自由を手に入れたんだ。
ごめんなさい、桃恵、藤井、大西。

――――――そして、ありがとう。

（後書き）

分かってもらえたら光栄ですね、友達の大切さ（（あらすじでも言った。

分かりづらかったり、よく分かんなかったり、つまんなかったらごめんなさいね（（汗

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5740j/

傷は隠せないもの

2010年10月15日20時45分発行